



素志貫徹

未来への投資

「成功の要諦は、成功するまで続けるところにある。受けた恩は石に刻め かけた情けは水に流せ」。ある政治家の座右の銘です。

四季の移ろいに、恩を受けた人の不在を思い起こすことがあります。

19日は敬老の日。80歳以上の高齢者が、昨年初めて1000万人を超え、100歳以上の高齢者も6万人を超えました。多くの人が「老後の生活設計に不安がある」と答えています。

「これからの生活は悪くなくていく」と考える人も、50歳代後半になると男女とも約40%に達しています。長年払い続けた年金は大丈夫だろうかと、間もなく一線から去る世代が危機感を募らせるのも無理はありません。

本市にとっても将来の暮らしの不安解消は重大な行政課題です。

「長寿社会像をきちんと描いてくれれば、余計な覚悟や

準備に煩わされずに済むのだけれど」との声を大切にしたいものです。

さて、わが来し方を反省すると、不摂生な生活を続けた報いか、四十代も半ばになるとシミやしわが増え、視力、体力の落ちようといった悲惨極まりないものでした。頭髪は白く少なくなり「老い」との闘いが始まりました。

人生において、加齢との戦いは負け覚悟の上であります。アンチエイジングという抵抗がむなしく響くほどに、追いかけてくる「老い」の足は速く、年とともに「もうひと踏ん張り」が利かなくなり自己嫌悪に陥る昨今です。

「葉桜の季節に君を想うということ」(歌野晶午著、文芸春秋)に、こんな主人公の言葉があります。「花が散った桜は世間からお払い箱なんだよ」「だがそのあとも桜は生きている」「桜は満開の時

期が短く花のない季節が長い」。

人も似たようなものです。年々、体力は衰え肉体はたるみ、見てくれも悪くなる反面、確実に増えるものがあります。それは知識や経験に裏打ちされた、実相を見る目であり、真相を見抜く判断力です。

「人生の黄金時代は老いて行く将来にあり、過ぎ去った若年無知の時代にあるにあらざ」。中国の作家、林語堂の老後に光を与える一言です。

医療、介護や福祉と行政課題が多い中、一次産業(農林漁業など)、商工観光業の振興を図ることは、指宿にとって極めて重要です。それは、指宿の強みを生かした新たな事業を展開することであり、まさしくそれが未来への投資でもあるからです。人と同じく地域も老いる時代です。

人も地域も「苦老」は嫌です。素志貫徹、健全な指宿でありたいものです。



指宿市長
豊留悦男